超短編②

「乳豊　葬り去られた力士」を読んで(20020716)

現在ではもう戦前（特に昭和一桁時代）の相撲界に詳しい方々も相当少なくなってきており、そういう意味からもこの本を執筆した著者の苦労は並大抵ではなかったであろうことは、この本が非常に多くの証言を基にして書かれていることからも想像できる。

昭和の初めから八年頃まで幕内で活躍した力士に乳豊（ちちゆたか／明治四三年～昭和三〇年）という一風変わった四股名の北海道出身の力士がいたことを知る人は、今ではほとんどいないだろう。それもそのはずで、乳豊は妻殺しという角界史上稀にみる殺人というスキャンダルによって相撲の世界から追放され、幕内優勝こそなかったものの、その数々の華々しい記録までもが抹殺されてしまっていた事実は、自他共に相撲通を認める私でさえも、本書を手にするまで知らずにいた。

乳豊はその四股名の示す通り、実に豊かな胸（おっぱい）をもっていて、彼が北海道出身で色白ということもあり、彼の胸は白人女性のそれにしばしば喩えられた。

本書には乳豊の数々の貴重な写真が掲載されており、なるほど、これが本当に男の胸かという驚きは禁じ得ない。残念なのはカラー写真が無いので彼の身体の「驚くほどの美しい白さ」を確認できないことだが、それでも一緒に並んだ他の力士との肌の色の違いは、白黒写真でもはっきりとわかる。まあ、時代が時代なので写真が残っていただけでも良しとすべきであろう。

彼の胸は力士であることを考慮しても異常に豊満であることに疑問も持つ者も多く、しばしば今で言う「豊胸手術」を受けたのではないかという噂が流れたり、本当は女性なのではないか、角界は彼が男性であることを証明せよ、という嫌がらせ（？）じみた投書も新聞社にあったという。

本書はまず乳豊という強烈な個性を放つ力士が、当時、世間からどういう目で見られていたか、客観的な資料を基に明らかにしていく。

そして彼の幼少時代を知る者の証言を通して、少年小村太郎（乳豊の本名）は実は十歳位の時には既に一人前の胸（！）を持っていたこと、本人は大きな胸を相当気にしていて、決して人前では裸にならなかったこと等の事実が明らかにされる。

また、違う証言では、彼は十五歳の時には、自分の裸体を人前に晒すことに興奮的な快感を覚えるようになっていたこと、力士になることを決意したのは自分の体を大勢の人前に晒して収入を得ることができるという、自分にとって理想的な職業だったこと等、非常に興味深い事実が明らかにされる。

十歳から十五歳の間に少年小村太郎の中にいかなる変化があったのかは今では知る術もないが、数々の証言から彼の肉体的劣等感が１８０度劇的に変化し、肉体的優越感にまで昇華したことだけは紛れもない事実であったことがわかる。

本書はそのクライマックスを彼がなぜ妻京子を殺してしまったのかの謎解きに重点が置かれている。数々の証言から、乳豊が稀に見るナルシストであり、また異常とも思えるほ

どの京子に対する愛情と嫉妬心の持ち主であることも判明する。
乳豊は京子が浮気をしているのではないかという猜疑心に苛まれ、いつしか自分のものより大きな妻の胸（なんと、京子の胸は乳豊よりも豊かであった！）に憎しみを覚えていった。

ここから先はこれから本書を読まれる読者のためにとっておこう。
相撲好きの人にはもちろん超お勧めの一冊だが、並みの推理小説も裸足で逃げ出しそうなほどに、推理小説として読んでも実に面白い一冊です。

超短編シリーズはフィクションです。念のため